イングランド英語

野口祐子

映画タイトル	My Fair Lady （マイ・フェア・レディ）
製作年	1964 年
DVD 情報	日本で入手可/英語字幕あり (173 分)
監督	ジョージ・キューカー
映画について	アイルランド生まれのイギリスの劇作家バーナード・ショーが 1913 年に発表した戯曲をもとにした、アメリカの A・J・ラーナー脚本による舞台版ミュージカルの映画化。当時のスターだったオードリー・ヘップバーン主演でヒットしました。2014 年製作の日本映画『舞妓はレディ』は本作を下敷きにしています。
主要キャスト	オードリー・ヘップバーン（イライザ役）、レックス・ハリソン（ヒギンズ役）、ウィルフリッド・ハイド＝ホワイト（ピカリング大佐役）、スタンリー・ハロウェイ（イライザの父アルフレッド・ドゥーリトル役）
あらすじ	ロンドンで社会の最下層に生きる花売り娘のイライザはある夜、音声学者のヒギンズ教授にロンドンの下町言葉コクニィの話し方をばかにされる。「こんなひどい話し方をする貧民の娘でも、発音矯正を特訓すれば上流階級のレディに仕立てられる」というヒギンズの豪語に惹かれたイライザは、花屋の店員になってもっとましな暮らしができるならと、ヒギンズの家に住み込みで猛特訓を受ける。最初は高圧的なヒギンズに反発していたイライザだが、次第に献身的な気持ちも生まれ、遂に完璧な上流階級の英語をマスターする。しかしこれが単純なシンデレラ・ストーリーに終わらないのはバーナード・ショーの原作の力でしょう。
英語の特徴 発音・文法・語彙	この映画は発音矯正が大きな意味を持つだけあって、階級と英語の関係について考えるにはもってこいの教材です。イライザの英語はヒギンズの提唱する「正しい発音」から程遠いものでした。ヒギンズはイライザと出会った同じ夜に友人となった音声学の学者ピカリングと、イライザを発音矯正して社交界デビューさせられるか、という賭けに興じます。映画前半に彼らが悪戦苦闘する場面で使われる例文が面白いので、以下に紹介します。 １．母音 a を[ei]ではなく[ai]と発音するのは現在もロンドンで耳にします。矯正のためにヒギンズがイライザに繰り返させるのは、 “The rain in Spain stays mainly in the plain.”という意味のない例文ですが、イライザは、“The rine in spine sties minely in the pline.”としか発音できません。ここで “in”以外の i は[ai]と発音されます。 2. 単語の頭の h 音を落とすのも特徴です。イライザによればヒギンズ

(c) 世界の英語を映画で学ぶ研究会
http://eureka.kpu.ac.jp/~myama/worldenglishes/

	の名前は「エンリィ・イギンズ」となります。イライザは“In Hertford, Hereford, and Hampshire, hurricanes hardly ever happen.”を練習しますが、h 音を全部落とし、代わりに ever を hever と発音してヒギンズをめげさせます。 　しかしヒギンズへの気持ちに変化が起こるとイライザは特訓の成果を示しはじめ、いよいよアスコット競馬場で社交界デビューとなります。　この場面は何度見ても笑えます。イライザは完璧な発音はマスターしたのですが、話す内容は花売り娘そのもの。同席した紳士淑女は聞いたこともない表現、たとえば “And what I say is, them as pinched it, done her in”「あたしゃ（叔母の麦わら帽子を）くすねた奴らが叔母を殺っちまったと思ってるんだ」の“do in”「殺っちまう」にとまどいを見せます。ここでも目的格の them が主語として使われ、as が関係代名詞 who の代わりになるという、コクニィに特徴的な文法が使われています。 　映画の後半、話す内容とマナーまで特訓されたイライザは、大使館の舞踏会で見事、異国の高貴な血を引く王女とみなされ、ヒギンズは実験の成功に高笑いします。
映画のみどころ	上流階級が集う舞踏会でのイライザの成功は大いなる皮肉です。花売り娘でも上流階級的発音と会話術と社交術を身につければ上流階級で通用する、ということは上流階級の人間とは所詮それだけのもの、ということをヒギンズの実験は証明したのですから。 　では「正しい発音」とは何でしょう？発音がイギリス社会の階級分断を固定化する原因の一つであるというのも確かであり、花売り娘として生きなければならないのは「正しい発音」を身につけていないからだ、というヒギンズの仮説には一理あります。でも方言の多様性を社会の豊かさとして認めない彼の考え方も硬直しているといえないでしょうか。 　脇役とはいえ、コクニィで陽気にしゃべりまくるイライザの父が物語のユーモアと奥行きを増してくれます。アルフレッドは「中流階級の道徳なんかにゃ縛られない」と繰り返すのですが、大金が転がり込むとそうも言っていられなくなるという、これも皮肉な展開を見せます。 　イライザは美しいレディに変身しますが、ただしそれはハピーエンドでしょうか？イライザのその後の人生はどうなるのでしょう？この映画は女性の社会的自立の問題にも触れています。映画の終わり方はショー原作と違うので、比べてみるのもよいでしょう。
その他	翌年製作の *Mary Poppins* にも同時代のロンドンとコクニィが出てきます。

(c) 世界の英語を映画で学ぶ研究会
http://eureka.kpu.ac.jp/~myama/worldenglishes/